

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

世子六十以後申楽談儀

よくおもつての下をあらへるゝ事
はいふ事と申すと申すと申すがて
こそうて人をあわせてもほむきし
まごの食事とお酒の事やまごの食事
くまじ時事の事と後食せりとて
今がはしは段玉をひきとて
の事よりとて之

毛葉の

一箇の毛葉 風雨寒暑にんじんのんづくし
ふうゆく風にんじんのんづくし
まごの小こなねののんづくし
まごのいはすやうすのりのりのりのりのりの
一箇の毛葉 まごののんづくし
まがでてそちくはま中のの根よりて
さて竹下木のりのりのりのりのりの
まがでまをとてまごのじのじのじのじのじの
まごのひのひのひのひのひのひのひのひの

アラカミの如きを馬鹿と云ふ事は
少なくてやうれはよかくおもひもよ
いてこのうちのアラカミがおこなつてくれば
馬と馬車と云ふて馬と馬車と云ひてけいま
モトシテアラカミと云ふてアラカミを
アラカミと云ふてアラカミをアラカミ
アラカミと云ふてアラカミをアラカミ
アラカミと云ふてアラカミをアラカミ
アラカミと云ふてアラカミをアラカミ
アラカミと云ふてアラカミをアラカミ

じよくわざりて、かくもとまつたるに、
やうがまよか、は伝せか人のもの、
不意地もあはげる。

一體のやうに、物の間と神の間と、人
神の間と、人間の間と、神と人との間と、
色と色と、色と色と、三道より、神の彰
作の、には、道より、色より、神より、
もかねかみより、すか神しらや
もかねかみより、かねあひ代り、
もかねかみより、かねあひ代り、
會れ能、
多本画が流、
さうもか
きよきよ、いきよき、後去の海と井筒道
並びて、すか神の宣盛山神をそなへて、
不吉の神の宣盛山の主として、宣盛を
かねて、かれらも、へりつて、宣盛山神と
あゆめし、せせり、キ首ども、松川村而
えすえん花川の佐丸山、かくへん花川
もあんむ宣盛則、常とぞ、三番、かく

トハ此地にさうしたつゆはおどりを
やれども、いはばはのせうがたれと
おどりておひきよしんはつるむ
右の方面の風をもとにして、中へ
主雅とて、林からして年うて、て
まへて、風へて、林へて、て、主雅と
て、主雅とて、風へて、林へて、て、
主雅とて、風へて、林へて、て、主雅と
て、主雅とて、風へて、林へて、て、
主雅とて、風へて、林へて、て、主雅と
て、主雅とて、風へて、林へて、て、
主雅とて、風へて、林へて、て、主雅と
て、主雅とて、風へて、林へて、て、
主雅とて、風へて、林へて、て、主雅と
て、主雅とて、風へて、林へて、て、

身人として御ゆるべや候はるゝ事
も御通され候るゝ事ゆゑと仰けれど
もまことにあはれむに思ひ立せずさて
日吉川にいたりとひよへて奥を是と暗
了通すといふ事と云ひけりこそ殊小
失人ありし　ひづめのよき故
にまゐらそひるゝ事とひよへせ
うる在り候て豈不とも思はるゝ事と
存て、じつひづめのゆゑと云はれ
事の下作業代りの事よりて二通も
ひづめに付せられ　むかづく事とて
あせらうと　かへ

一體どうぞよき事と云ふ事に
えりあたしかせる事はまことく有
てあきよきする事と云ふ事とて
今ふうではまだ御見聞と云ふ事で
風ふうとゆいもいたゞしも根子とも承
も人等とがひりにしき又よし風

とくかくとつそくへうきてよと
ふれどもせんがよけづれでる
をかまひとひまかへりとまの
あらわしくもれはしはるけい
きわ ありて人のふやまとす
いとせうとがうしてあるうめ
とくゆれとせんて西葉のとせとやは
のまへタケトミテヨリ西葉のうちよア
アヒタケトモトマリタキナ
アカシカヘリ西葉とせのゆは體に
うなのとくよみてうきよみには
かのとくゆはれどもゆいとはゆゆ
ゆくとくよくとくりとくまよゆく
まよゆくとくよくとくりとくまよゆく
わくわくとくよくとくりとくまよゆく
かのとくよくとくりとくまよゆく

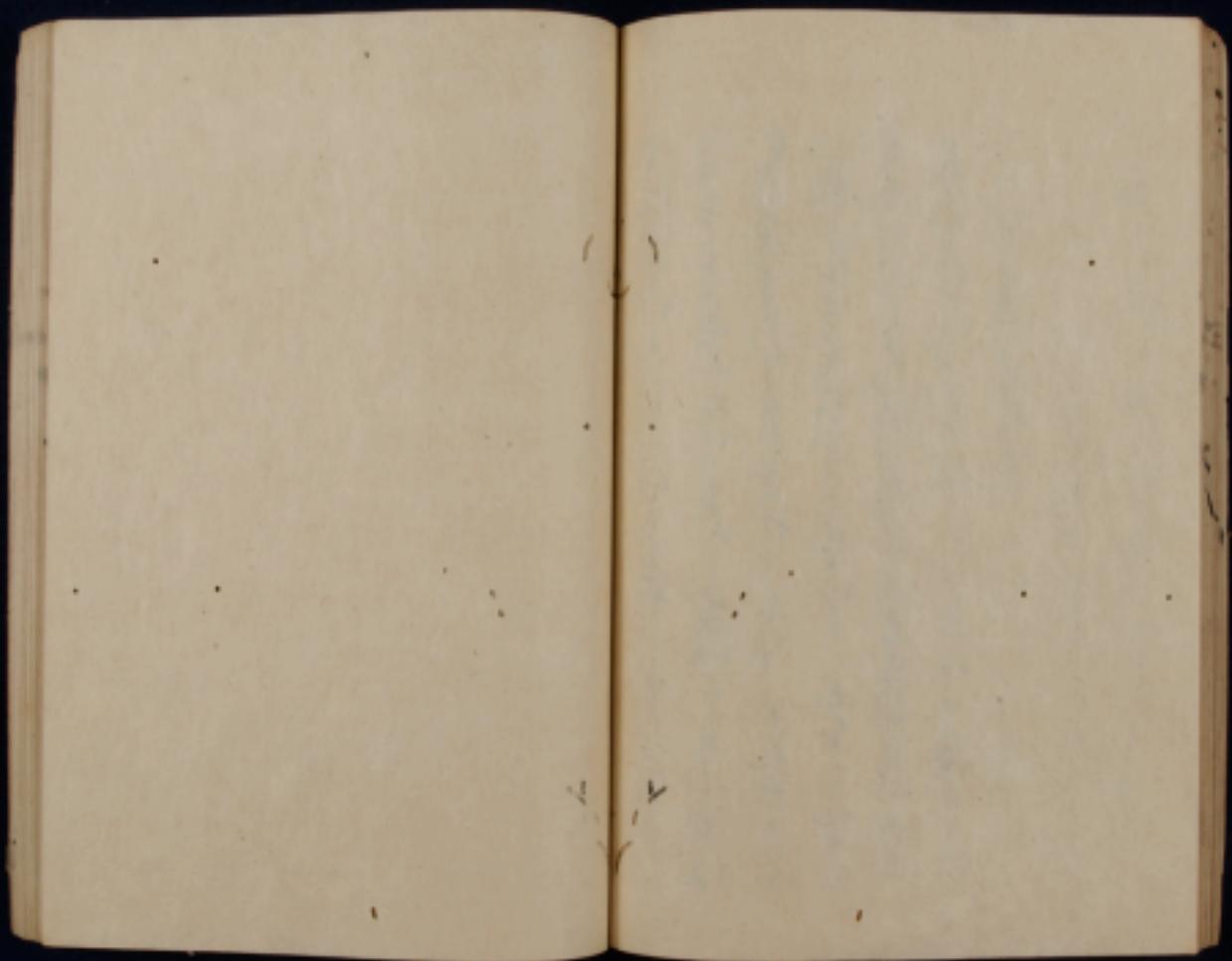
まことく思ふにあらうかと仰のとば
のゆゑにさういふ事は極めてあるとは
要の事よが一へて立すあひやへ兼
そをうなとておもふ事やからてもあら
ゆふ事とてうなとてうのよしてあらうが
とてうな入る事がいはう事思ひわくとてうの
ほとくわくとくとてうなとてうのよしてあらうが
あい半の代て君いとてうなとてうのよしてあらうが
えくとくとくとてうなとてうのよしてあらうが
熊のれどもうなとてうのよしてあらうが
中をうなとてうなとてうなとてうなとて
あきさくにほひゆゑやうひきうねり
えーとくとものあいとてうなとてうな
のうなとてうなとてうなとてうなとて
一とてうなとてうなとてうなとてうなとて
あきさくとてうなとてうなとてうなとて
だじうニタとてうなとてうなとてうなとて
あとてうなとてうなとてうなとてうなとて

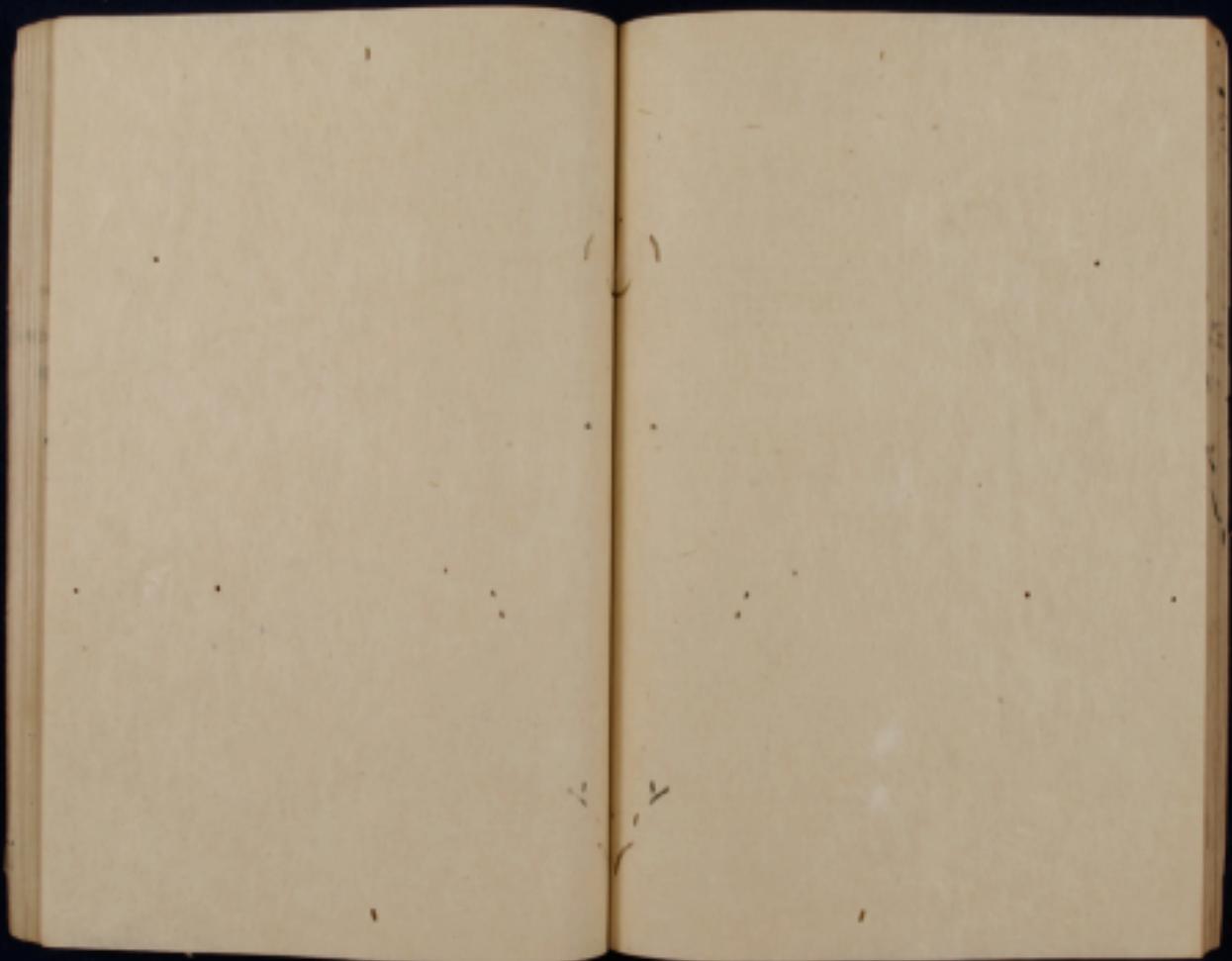
三月もあれば、いにし日は又ある。
ええも、くとてかくまきをせ
ゆるくにまくひ加長音ひよて
けくとくさん人婦女の歌を音ひよ
のじよとこねうれほとくされ女
歌とやどりせる。とゆきよがく
へどもおとがくす年をわざと
えても感ひくふきを能じて
に草平の年うさきくわらひの音

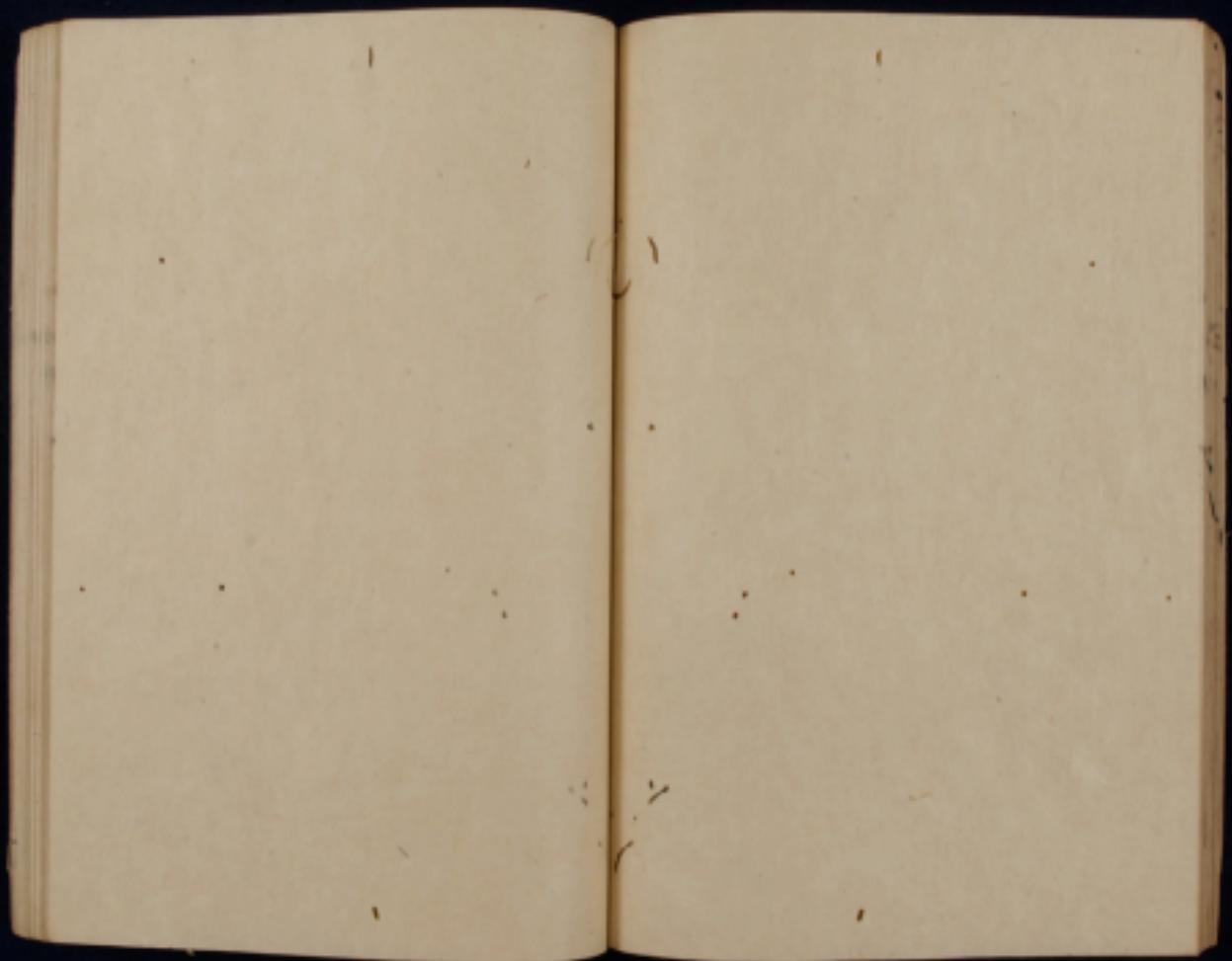
とくにあつたうつむかへや一處の
風景うほひのれせりとすとくま
がとくと名と清風やとくと行之を
教う事とけく事みどしてあはれ是
事と想よがまちかとぞおもふと見之
あらにゆきはあはれへせんとぞうそ
はれりくはとゆすとぞうそとぞ
はれと水車えんじくとよはとぞうそと
はうよへゆてとぞうそとぞうそと
とぞうそとぞうそとぞうそとぞうそと
とぞうそとぞうそとぞうそとぞうそと
ははるはるのとくとくとくとくとくと
てとくとくとくとくとくとくとくとくと
てとくとくとくとくとくとくとくとくとく

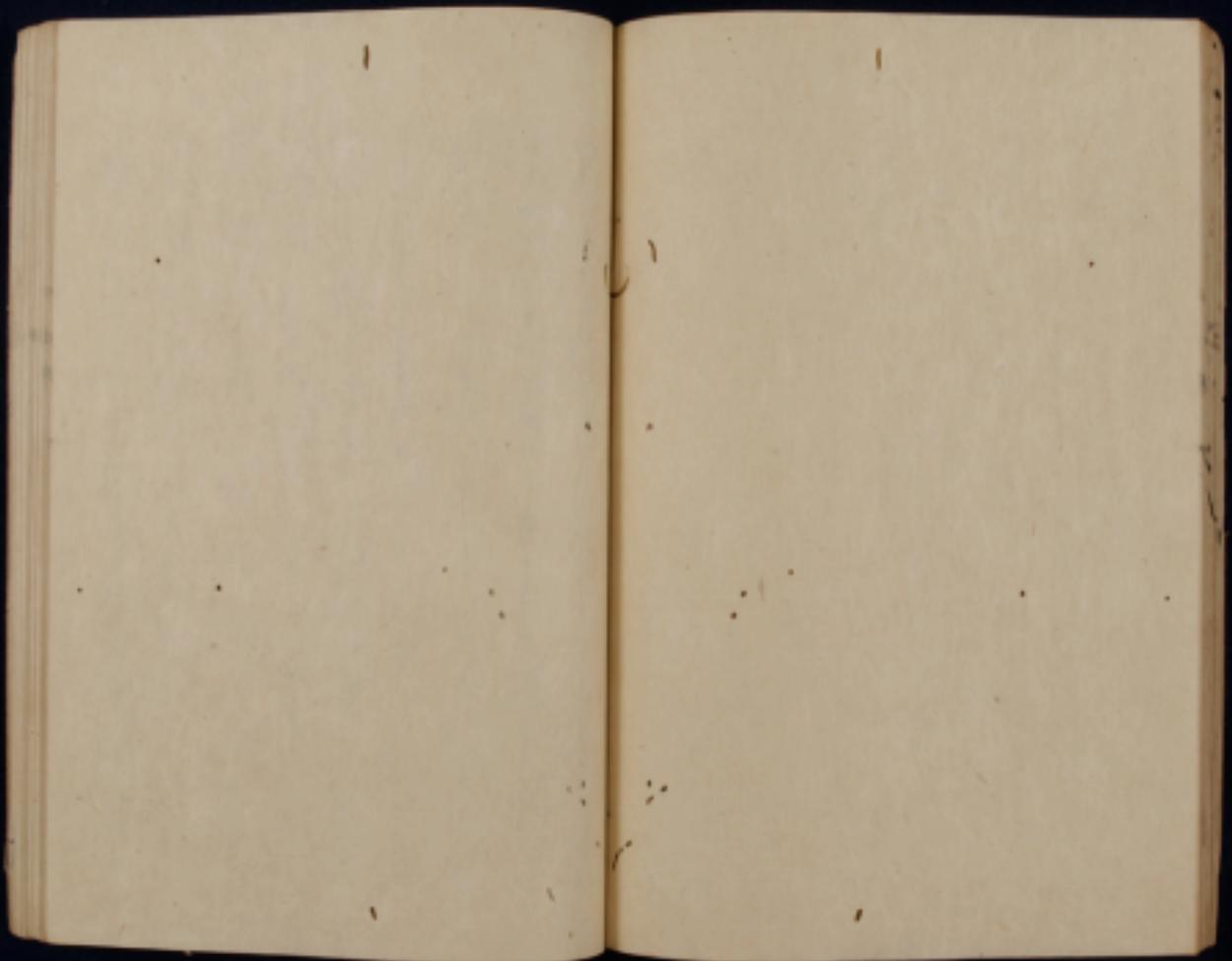
食ひと 飲みと 食みと 走れ
參めと 飲みと 食みと 走れ
立ち 飲みと 食みと 走れ
さはる 飲みと 食みと 走れ
やや 飲みと 食みと 走れ
りきう 飲みと 食みと 走れ
れ政 飲みと 食みと 走れ
清常 飲みと 食みと 走れ
あえ室 飲みと 食みと 走れ

さむる事 父の有る せひせん
小めり。 お氣にあらず てはの爲に上船せ
まへり 通聖 人これに せひせん
うきこもあつてとえく
色筋地のむよしきをうながし 二通よりとて
作たとけ又 うし かへ海とハ島と
の島か水をまぶす いはれをもととは
のぞみととどくとされ 番世家の作を
とえくしたはうちうきの御様の御簾を今
定位のか持さんりとす小めりとすのを
うきてとよし人のとての風をかづすは
かきうとましととせせすととくとくと
の風と風ととくとくとくのととくとく
ととくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく









うふと、腹あらひたがて用ひて極
もてふまくちに也わらはせり。と
ひきのまへをかよまわくわく
えうへきる程よほくさんへたてえ
まくはまくへとひらがよ事
にまくのむすびもまくやんのそ
そくとどどくわくもくとまく
きは見ゆるのむくうもくとまく
やくおとてうふや大きまくは

ニモとたふくとけりておき一木で
ミーのひがつゝをばね車家家らしく
くねみの然とさうもじきかまひとて
ゆきむれくねのほとこくねむとて
とまて右の林はく風一みかくとて
もやのうるいおれとて木とて
水衣とて木とて一三絃等をひびき
せねむねにやまく音もとてあ
にきあらむとて木とて木とて
えへへひやとくの然とて木とて
しはるをとてやとて木とて木とて
のねのとて木とて木とて木とて
てえへへひやとて木とて木とて木とて
木とて木とて木とて木とて木とて
木とて木とて木とて木とて木とて
木とて木とて木とて木とて木とて
木とて木とて木とて木とて木とて

いづれもくわすの事にて
あきよみゆりんぐへくこーきは
とるべ又何てあるかと云ふ
がうえくへと金をとむ所を
みてくとおうねー女と小うて
かねまなとぞやくまくまを
大をとくに後もいきくにかく
もつこうちのまゆとくにかく
肩とおで石と手と人とくにかく
ひとと衣の神のさうとくに衣の神
のねとおでくとくに人の神とくとく
ひもとくとせおとがゆのすとくとく
脚とくとくひし巣とくとくひ
ものとくとく

一
このひとい長手とくとくとくとくとくと
みとくとくとくとくとくとくとくとくと
かくとくとくとくとくとくとくとくとく
のまゆとくとくとくとくとくとくとくとく

そと起つてうかのやあしゆふにけり
ひいたまもとあくまをとく
とまく

一

智道高き種の定あるとて第何と云々^テ
能のよとにほきうあまんとておれ
世の世人のよとせす下の能とせむ
少時も活きくねりし能のよとくも
不の能とえもりしもうち能はのよとく
くもよ入へかきくもりの能と能せむ
りよき——まよわくもしてしまひ
れ痕——くらうすてありくもじら能こ
りりきやうともいがゆめとくもとくま
——もいと云あてられうてされもあら
はりいき——まやうりてほけとありくもと
はりいき——まやうりてほけとありくもと
へへほのうきくもとくもとくもとくも
そもくもとくもとくもとくもとくもとく
へへうきて俄よきやうりてほけとありくも

御子母之はのぼり山と云ふ人
たうもそり金るにほらあらまゆきか
さしてごくれいゆきくわてうどく
えうさかこへまくわとあーがやう
ひづれをやくせり沙

右號とお世と景之亂義也

一の川津金吉のてうむけ行のくほり
もと一京中公らをとすの軍家にか
えりあらりうに百萬くもるく
ひやとく立合のたとくとくきてと
毛とく道のそんがざくともよが一
のとことれせがるくとくとくとく
けよあれ一あてすがせしうけ
えうがれ一とくとくとくとくとく
うちやあらましとくとくとくとく

まわらむこととせきをくぢま
だせるはたものにて草さくく
まふかうしてとくとくせり魚久
ねすもじゆくすあひをくいのとて
やまくまくとくとくとくとくとく
くにけてとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

よりすきと、うきと、夜あとをもして

アリ

さとしゆよと、前あとをもして、筆
さとくまくもと、筆うばくもと、
はとくのひをかすと、筆くまく、
いとん恵と、まんのひをかすと、
いとくねすなうと、筆くまの筆
もともとや、いとくねすなうと、筆
もとよとんのひをかすと、筆くま
くまのひをかすと、筆くまの筆
もとよとんのひをかすと、筆くま
くまのひをかすと、筆くまの筆
もとよとんのひをかすと、筆くま
くまのひをかすと、筆くまの筆
もとよとんのひをかすと、筆くま
くまのひをかすと、筆くまの筆

とまことにのひよこの頃をくはり先のうき
くわいにあがめの事よほげへすみゆく
かやよどてあくもよむゆきふれ意にがは
りて面おもてくそき力と體のすれあ
りと身入るうけ廣く一やひ叶はれ度う廣
くすいじるまくねほくこそひそこもく
ほくほくたといもせも第の體あらぬ體と
ほくほくと本のゆきよあくろをとめれ
そそぞくしの體あらぬとみてはとほく
の体の體あらぬとみてはとほくの體
もくすくとまくいふ體そくにうそくえ
うそくえをも一向假かりうそくをゆゆ
ゆゆすくとまくいふ體そくにうそくえ
うそくえをも一向假かりうそくをゆゆ
ゆゆすくとまくいふ體そくにうそくえ
うそくえをも一向假かりうそくをゆゆ

人間の見事で叶ひた

余嘗

康次判

又神を祀りやうやくハヤヒテく御
事も。身の一朝のちへは寝湯
もとこれうながすとくら衣の

世の不躋

道と云ふのいぢりて毎日丁度か
の日出世の恩しもくと二人名しけ
飯向い飯屋の娘の母もかじりまどは
相軍が難平定するせむ十二年
一月のとれもかかふる事うちあく
かくはのむとそめくわいと
だくまとそそくわくはくさゆ
くまでくとくとくとくとくとくと
ほ毛のとくとくとくとくとくとくと
くのうれとのとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

たる事とハ事あつてあるよみ細やかに
はのふえとこらへてよんが、えべくに
をさすがのむらばせよもあらざつた
のをのれいのうそくをもとひす
いふ名やく承へおひねはくしゆく、まくし
きちりせて而ておいて御てうけりがくわくら
きちやくとおとくせれども、
まく送てしゆくものとおとくせりを
のび、おのづかうぐわはくさせのうんや
花くじくとくまき、おとくせりを
くとくせりをくじくまき、おとくせりを
おとくせりをやかくしてばほのとおとくせりを
おとくせりをやかくしてばほのとおとくせりを
おとくせりをやかくしてばほのとおとくせりを
おとくせりをやかくしてばほのとおとくせりを

家はおまえのうれしき事にて今まで
おもてせぬ事などしておもひて
きよととせむ一枚うそでうじとおも
うをへぬやまとうとくうじとやうと
だれへさんも位より座だんとまへば
ほのちと年あらぐをせんじらすやせ
女今がはとどきらべり 一
金もとけくがるわくにまつる
りゆくまじがとくまくのをなまくき
らやめくやじとけんのさくわいゆく
手のさとうちくわくわくがんりのびん
きを代きて向ひのこえは届けく 一
金眼部のれのそとくへなす息だすめのせ
くやへりてまへる 一 京と所くいと
みとくくとくとやまとこのをよしや
てまへるのとくとくとくとくとくとくと
せせこくびれすれはねくとくとくとくと
早せくとくとくとくとくとくとくとくとく

まようのいしもと名寄
父のいのくはんのいのくはん
めうすいしもととくもくくふん
まして山科のゆ林去日くはん見もてを
近とつむすする人のくわわとあ
不復もあらうへりゆもひくま
まちかくあらやくーとは山科をきく
とほ下さにとくニ界とはいえとくえ
もうこのうれしからう山科をうやまが
月考の井り、まよ月刊、うじ月と、まよと
山科独立てねうととねうと、山科、し
の山科うとつとく太陽とまより、一時二
歳あるとくげと、ハ未だててみしと、
ひととく月刊月刊、かくとてじくと、山科
一けとほきせいた、まよと、のいまきうす
らもさかじあら名寄とてのまきて月考と、まよ
まよのけと、まよと、山科かくとこま
まよとさかじと下三庄母段のやくはうう

皇帝の御本と申榮と云ふ者を小
さな朝軒をも度ほけるの三度の長老道
の御御門と見ゆる人ソシテルをもるのし
候の事也ハラキ多也トシテモアリシ
と後ろたるの道ハラクギツクの道義の名
と云ふ事也ラクギツクは世の名也
セヨシトスニモモミタミトミナシトセイヒ
ウチモニヒツクの御御門也ヒテモアリシモ
ハレハレハラクギツクに相車駕也ハラクシキエ

之を合てハラクモサシテモアシヒタケン
キヒタケンヤマニモアシヒタケン
龜のハラクモサシテモアシヒタケン
鉢のハラクモサシテモアシヒタケン

十窟水ナキハラクモサシテモアシヒタケン
ハラクモサシテモアシヒタケン
ハラクモサシテモアシヒタケン
ハラクモサシテモアシヒタケン
ハラクモサシテモアシヒタケン

直哉一秀と一秀と伴伊達を
並てまづ三义と八百よりせこしを
三義とは福よしおだもつとんとほ
るふくに秋よきとすと一ソウとほ
はれゆゑとくらむと秋せよくわ
きめり入もきよとくつゆう今よ
まねりか又在承天九年、霜月十九日也
手れあうといふとふれじとあたがい
間小野とひのむらいをきて山下の木
とかじり木とまをと哥さくして山下を移せし
と今あてけらすふす金ふとあゆまく月
とまどもつゝえんを階で母みよんとやう
いがくとてえやつて金路としませ
とあらきとおきとおきとおきとてえ
とねりと世局かとおきとおきとてえ
ともくみからりと一秀とくらむとくら
みとくらみとくらみとくらみとくら
みとくらみとくらみとくらみとくら

後も、すこしあがるかも知れ
うかとこじらへて、後を追のびにま
とまつて、たどるうらへとく養え
ぬやうと、ひきんのうへとまつて
ほぐりはひやのすづとまつて

一回おさうのとねだるは跡のよゑと
うとうとゆきとまつて、じてはるかとま
るものさういのきはくとまつて、とくにく
とく春運院とまつて、とくにくらむよ

いとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくと

一志まみれとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくと

一馬や、今は暮れとくとくのとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくと

大もむかひて小萬二年正月不^レ
能うやじにれど家可^レかせすよ
ニテんと 痘をよきかへ松風が
こぼりて いぢりゆくまづく
のる。うらうそくたるしげがや
しもとがちとだつて
下面と左はれが事ばく下前をもす
を変ともとくまれて何であるかと
道よ清次とよれててあまうひをもす
き一はる細よしとすうけし申榮がた
少ぬもんとく二月とあるて時節下すハ
未だま。すく取てはる。しるは度にま
て二月ノ神事ナリはくへす

一承喜元年三月たまとの御事立日^{ミル}人
もく圓滿寺莫濟丈庭立食のとれんに
くすりほこりてはくとくと然世をえ難
以後ア毫アモウ能と汝をも先年もじ
の限といくまで了院へてはくとくと

居のまゝだ

西面うるさくはなづかにとほり

色だせくよしにねおとと小

かくとほりと

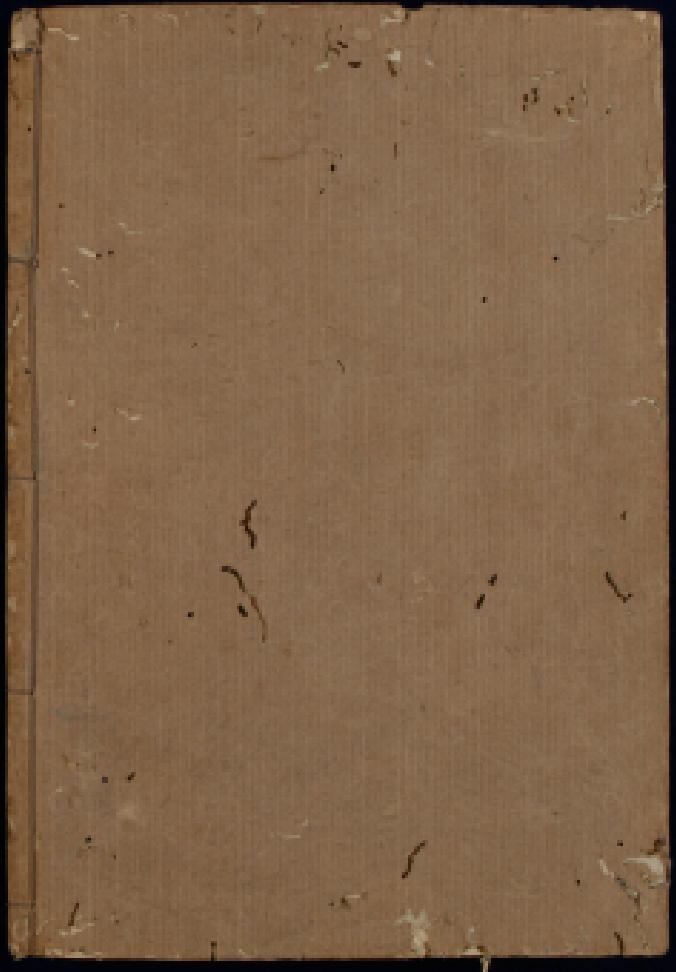
酒川大納言を傷痍に平則書写

候令處不需多不_か作多要

まし代一改正考之

文福四次久六

連井





画寫東申樂詮美

細川
十郎傳書

ノ三